

平成30年12月28日

学位請求論文（論文博士）審査報告書

学位請求論文：はじまりの哲学

ーアルチュセールとラカンー

学位請求者：専修大学文学部兼任講師

氏名 伊吹 浩一

審査委員

主査 文学部 教授 伊吹 克己

副査 文学部 教授 船木 亨

副査 青山学院大学 総合文化政策学部 准教授 福田 大輔

本論文は、現代フランスの哲学者であるルイ・アルチュセールの哲学理論の全体を「はじまりの哲学」と位置付けた上で、「はじまり」をめぐるアルチュセールの思索と実践の軌跡を、様々な角度から検討していくことを目的としたものである。特に注目されるのは、ラカンの精神分析理論のアルチュセールに及ぼした影響に焦点を絞っているという点である。

精神分析はアルチュセールの理論活動の「はじまり」の駆動力となり、その後の理論活動全体を通じて大きな参照軸として据えられているが、そこにおいてはジャック・ラカンからの影響は見逃すことはできない。このことをどのように裁いていくのが、この論文に問われている。しかし、アルチュセールの理論においては、その「はじまり」しか示されず、そこから精神分析の理論にどう入り込んでいくかといった議論は具体的に語られなかった。本論文において問題とされたのは、アルチュセールが開いた端緒から、それを引き継ぎ、さらなる展開へと歩みを進めることである。

とりわけアルチュセールが提起し解明し切れなかったイデオロギーに関する問題を、再度精神分析理論に接合し、究明する企てとして行うというのが、本論文に課せられた具体的な課題であるといえる。

第一章では、理論活動においては自明の「読む」という行為に焦点が当てられた。アルチュセールはこの「読む」という行為にこだわった。なぜなら、ここに定位しないかぎり、真の「はじまり」はないと彼が考えたからである。そのとき模範となったのがラカンの精神分析の理論であった。ここにアルチュセールとラカン、マルクス主義と精神分析との出会いが実現する。

第二章は、アルチュセールのイデオロギー論についての考察となっている。アルチュセールのイデオロギー論は多くの思想家に影響を与えたといえるが、とりわけ「イデオロギーは物質的な存在を持つ」というテーゼの中で示された、精神に対する身体的行為の優位性はこれまでのわれわれの心身観を根底から覆すことになった。たしかにそうしたことは現実には起こり得るが、しかしなぜ、起こるのか。これを解明する必要がある。

第三章は、前章で身体・行為における行為の問題について考察したことを受けて、身体の問題へと重心を移す。ラカン的に言えば、行為のシニフィアン化が「イデオロギーは物質的な存在を持つ」というテーゼの基本にあったが、そこで、なぜ精神ではなく身体を入口にするのか。がやはり解明されねばならない。このために要請されたのが精神分析理論であった。これは同時に、アルチュセールのイデオロギー論の行き詰り、つまりイデオロギーの強靱さばかりが強調されることになってしまったことの原因の解明にもつながったと著者は主張している。

第四章は、アルチュセールの国家論について考察されている。社会秩序の維持には不可欠なのが国家の制定する法であるが、法が機能するために重要な役割を担うのがイデオロギーである。さらに、社会構成体は日々生産と再生産を続けねばみずからを維持させることができないが、ここでもまたイデオロギーが重要な役割を果たす。生産活動は労働に従事し得る能力なしには不可能であり、こうした能力を身につけさせるのがイデオロギー装置である。そして資本主義体制が確立・維持されるためには、自由と平等というイデオロギーが自明のものとして示されている。人間は自由であるとされていても、実際は自由であると言い難いところに問題がある。この自由のパラドックスに関してはアルチュセールも気づいてはいたが、これが生じる原因については究明しなかった。それゆえ、ここではアルチュセールに代わって、この問題についての精神分析を媒介にした究明が試みられている。

第五章では理論と実践とが問題にされた。社会変革を標榜するなら、人々の意識を根底から変える理論が必要になる。そこで問題になるのはイデオロギーである。いまあるイデオロギーが未来への跳躍を阻んでいるからである。こうした事態を突き破っていくのが科学であった。認識はつねに科学によって切り拓かれ、哲学はそれを促進する。しかしイデオロギーののりこえは困難をきわめる。アルチュセールはその理由を解明するのが、不十分であった。そのために彼はイデオロギーからの離脱の契機をつかめていないと著者は見る。したがって、ここでもまたアルチュセールに代わり、精神分析を媒介にした解明を試みられている。

第六章では、まさにアルチュセールのマルクス主義活動家としての「はじまり」に遡り、その可

能性を追求する。その「はじまり」は第二次大戦中の捕虜時代にあり、大戦終結直後の収容所にはコミュン的なものが実現されていた。アルチュセールはそこから共産主義に関する最初のインスピレーションを得た。これ自体は、マルクス＝エンゲルス以降、コミュン的なものつねに未来社会の参照軸となってきたと言っている。社会変革運動にはつねにコミュン的なものが内蔵され、しかもそれは人々を惹きつけるのはどうしてだろうか。それは、コミュン的なものは祝祭的であり、祝祭がひとを魅惑するからである。こうした祝祭が人を惹きつけてやまない理由を解明するために 20 世紀フランスの思想家バタイユの思想が参照される。注目されたのは、近年世界各地で巻き起こる民衆闘争であり、そのどれもがコミュン的なものを内包しながら展開されているという点である。この事態を契機にし、コミュン的なものの現代的な可能性と社会変革の展望について、ネグリ＝ハートの現状分析を踏まえながら考察していく。

この六章が本論文の一側面を「左翼運動史」という性格をもつという点を如実に示しているが、本稿の要となる議論は、アルチュセールがマルクス主義の刷新を図るために行ったマルクスの理論とフロイトの理論との接合、とりわけ社会思想の画期となったアルチュセールのイデオロギー論を中心に据えた精神分析的展開の再検討と深化であると言える。

以上のような内容をもつ本論文について、さまざまな議論が為された。

まず、アルチュセールの歩みは、純粋理論的に見るなら、本論文でも言及されたように実存主義者サルトルが構造主義の人々によって批判され、後者の議論が優位に立つといったフランス現代思想史に重ね合わせることができるが、内容はそのことに触れることはあまりなく、むしろフランスにおける「左翼運動理論史」といったものになっている。そのことを問うと、むしろ「左翼運動理論史」の文脈を示さなければこの論文の理解は得られないと考えた旨の答えがえられた。また、上記で言及されているラカンとの関係を示すという点については、大きくクローズアップをする必要があると考え、これを詳論したと本論文執筆者は答えた。

続けて、「イデオロギーの物質性」に関して論じられたパスカル、デカルト、ベンサムの哲学との照合について質疑応答がなされた。こうした哲学史上の重要な議論にかみ合わせて論じようとする姿勢は高く評価されるが、残念ながら現代のラカン派の研究者の論考への依拠が多く、透徹したものとはいえないところがあった。なかんずくパスカルとアルチュセールの思想の親和性については、著者独自の見解でありながら、パスカルのテキストとの照合など、立ち入った議論ができていないことは惜まれる。

さらに、科学とイデオロギーの関係および境界線についての質疑応答がなされた。今日において科学が産業や政治と結びつき、「イデオロギーを捨てて科学に従う」とマルクスに主張された際の従前の純理論的な科学はもはや期待できないという側面についての確認がなされた。だからといって科学を捨てて共同体の形成を期待するのではなく、科学へのこうした問いがさらに展開、深化されることが期待される。他方、ラカン理論のまとめが本論文において試みられているが、相当の頑張りが示されていると言っている。とりわけ、「去勢」と「対象 a」という中期ラカンの概念の把握は非常にクリアであり評価されてよい。ラカンの二次文献を中心に参照する読解の瑕疵は否定できな

いが、本論文執筆者の嗅覚とでもいうべきもの – 研究者としては重要な資質のひとつである – によって、ラカンの基本概念の本質的把握に達している箇所が散見された。もちろん、ラカン理論のまとめがこれにつけるのかどうか、さらにはアルチュセールのイデオロギー論の可能性のすべてをラカン理論ですくい取れるのかどうかについては議論が分かれるが、それは本論文の枠組みを超える問題である。

以上により審査の結果、これにあたった三人共に、本論文は博士（哲学）の学位を授与するに値するものであると判定した。

以上